

幼児期および児童期における 環境教育と酪農教育ファーム（その1）

— 領域「環境」および生活科の学習内容との接点から —

藤 永 豪

The Relationship between Environmental Education and Dairy
Farming Education in Early and Middle Childhood (Part 1):
Focusing on the Point of Contact with the Contents of the Field
“Environment” and Life Environment Studies

Go Fujinaga

I はじめに

2018年度の新幼稚園教育要領に続き、本年度より、小学校の新学習指導要領が全面実施となった。その特徴の一つは、前文の中に、「多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培うことが求められる（文部科学省 2018a, 2018b）。」という文言が設けられたように（手島 2017）、「持続可能な開発のための教育（ESD）」を念頭においていることにある¹⁾。ESD（「Education for Sustainable Development」）とは、「諸問題の要因となっているこれまでの開発のあり方や私たちのライフスタイルを見直し」、未来に向けての「持続可能な社会の担い手を育てるための教育」（日本環境教育学会ほか編 2019）であり、その中には、気候変動や自然災害、生物多様性などの環境教育・学習が位置付けられている²⁾。この環境に関する教育・学習には、幼児や児童（ここでは小学校低学年）を取り巻く様々な対象としての「環境」、すなわち、身近な自然や社会、地域、人々の暮らしなども含まれ、それらに興味・関心を

持ち、自身とのかかわりに気づき、知り、考えることからESDは始まるという
てよい(藤永2020)。実際に、ESDの推進拠点として活動するユネスコスクー
ル³⁾に認定された幼稚園や小学校では、自分たちにとっての身近な「環境」に
ついて、主体的に学ぶための体験型学習が実践されている。また、一方で、わ
が国では、ESDの本格的な推進に先立って、これまでの知識偏重型の学習に
対する反省と、いわゆる「生きる力」の育成を目指し、直接体験を重視した学
習活動が試みられてきた。しかしながら、例えば、以前の2008年に行われた
生活科の学習指導要領の改訂においては、改善の基本方針の中で、「指定校な
どの調査などによると、学習活動が体験だけで終わっていることや、活動や体
験を通して得られた気づきを質的に高める指導が十分に行われていないこと」
が課題として指摘され(文部科学省2008)、一方、新幼稚園教育要領では、「総
則」の改訂の要点(「指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価」)において、
「多様な体験に関連して、幼児の発達に即して主体的・対話的で深い学びが実
現するようにすること」(文部科学省2018c)という文言・内容が新たに示され
た。こうした指摘や改訂を踏まえると、今回の新幼稚園教育要領と小学校の新
学習指導要領には、従来から提唱されてきた「生きる力」の育成を、より具現
化するために、ESDの視点が組み込まれたものとも解釈でき(日本ユネスコ
国内委員会2018)、その目的達成のための教育実践として、体験型学習を位
置づけることができよう。

本稿では、このような学校園教育での体験型学習の意義を念頭におきながら、
酪農教育ファームの活用の可能性について着目し、その幼稚園教育の領域「環
境」および小学校低学年の生活科における環境教育の学習内容とのつながりに
ついて若干の検討を行う。

Ⅱ 酪農教育ファームとは

ここでは、酪農教育ファームとはどのような活動なのかを紹介する。そのた
めに、まず、教育ファームという概念について簡単に整理しておきたい。教育
ファームとは、もともとヨーロッパ諸国において、学校教育のみではなく、子
どもから高齢者までが、自然や農林水産業と触れ合う生涯体験学習の場とし

て、あるいは、障がい者や精神的疾患をかかえる人々のセラピー効果や心的療養をも目的として行われている活動を指す（藤永 2017）。大島（1999）は、学校教育の観点から、教育ファームの先進国であるフランスを例に、同活動の定義について、「農業さらには自然や環境問題に親しませるために、農場を訪れる授業が行われ、このような授業を行うことができる農場（ファーム）が「教育ファーム」である。」と述べる⁴⁾。もちろん、この中には、酪農・畜産業も含まれる。

これに対して、日本では、2005年に食育基本法が成立し、翌2006年には食育推進基本計画が策定されたが、この食育推進の一環として、農林水産業の体験学習活動、すなわち、教育ファーム活動が盛んになっていった⁵⁾。そのためか、日本の教育ファーム活動では、学校園等の教育機関が中心となって実施されてきたことが特徴の一つとして挙げられる⁶⁾（藤永 2009）。

こうした政策理念のもとに展開してきたわが国の教育ファームであるが、これに先立つ1998年7月に、「社団法人中央酪農会議の提唱により、教育関係者と酪農関係者の協力を得て、酪農教育ファーム推進委員会が設立された⁷⁾。さらに、2001年1月には、「安全・衛生管理が整い、教育活動をするにふさわしい牧場を“教育を行うのに適正な牧場である”として認証する、「酪農教育ファーム認証制度⁸⁾」（酪農教育ファーム専門委員会 2005）が創設された。酪農教育ファーム推進委員会の活動目的としては、以下の5項目が挙げられている（酪農教育ファーム専門委員会 2005）。

- ①第一次産業としての「酪農」の役割とともに、「酪農生産現場としての牧場」および酪農の立地する農村の自然景観・生活文化を通して、環境保全やリサイクル型農業生産などの社会的テーマをも視野に含め、農業・酪農の持つ多面的・公益的役割について国民に訴求していく。
- ②生命産業とも称される「酪農」の産業としての特性を生かして、子どもたちの「生きる力」を育む「心の教育」「生命の教育」を支援するとともに、生産者自身への啓発も図っていく。
- ③原料乳を生産・供給する酪農生産の工夫や努力、地域産業との結びつき、

自然との共存の仕組みや牧場の動物たちの生態、さらにわが国の食生活における牛乳・乳製品の優れた役割などについて、より確かで詳しい情報や知識を学校教育や地域教育の場を通して普及・啓発していく。

- ④酪農生産現場である牧場を、上記の目的に沿った「教育の場」にふさわしい機能、環境を備えた「酪農教育ファーム」として整備するとともに、生産者に対して指導者としてふさわしい教育・指導を実施する。
- ⑤上記の活動を推進するため、「酪農教育ファーム認証制度」を創設・運営するとともに、教育現場、酪農生産現場にふさわしいシステムや教育プログラムの浸透、および教育現場、酪農生産現場にふさわしい教育ツールの開発を図る。

羽豆（2008）によれば、この「推進委員会が提唱する酪農教育ファームとは、酪農体験を通し、子どもたちの「食」と「いのち」「心」の学びを支援することを主な目的」としたものであり、「これが、我が国における教育ファームの最初の動き」であった。さらに、羽豆（2006）は、酪農教育ファームの成立背景として、「教育ファーム」というコンセプトが生まれたのは、20世紀半ばのアメリカとヨーロッパであった。その発端となったのは、第二次世界大戦直後のアメリカであった。戦争によってすさんでしまった子どもたちの荒れた心を、動物たちと触れ合うことを通して和らげようとするところから始まったものである。」と述べている。木下ほか（2009）も、教育ファームの成立に関して同様の背景を指摘している。

また、社団法人中央酪農会議が発行した『酪農体験学習 ハンドブック』においては、酪農教育ファームの目的として、「酪農体験を通して、食といのちの学びを支援する」こと、定義として、「酪農や農業、自然環境、自然との共存関係を学ぶことができる牧場や農場」と明記されている（酪農教育ファーム専門委員会 2005）。また、活動目的として、前述の5項目を整理する形で次の3点が提示されている（酪農教育ファーム専門委員会 2005）。

- ①牧場や農場を教育の場として開放し、酪農や農業の持つ多面的機能や公益

の役割，環境保全や循環型農業生産について，理解してもらえるように働きかける。

- ②生命産業である酪農の特性を生かし，地域や学校と連携しながら，子どもたちの「心の教育」や「いのちの教育」「食の教育」を支援する。
- ③生乳を生産する酪農家の努力や工夫，自然との共存や家畜や動物の生態，わが国の食生活における牛乳や乳製品の優れた役割など，確かな情報や知識を広めていく。

以上からも分かるように，酪農教育ファームの活動内容と目的には，環境に関する学習とあわせて，「生きる力」や「心の教育」，「いのちの教育」，「食の教育」といった幼稚園教育要領や生活科の学習指導要領においても重要となるキーワードが含まれる。

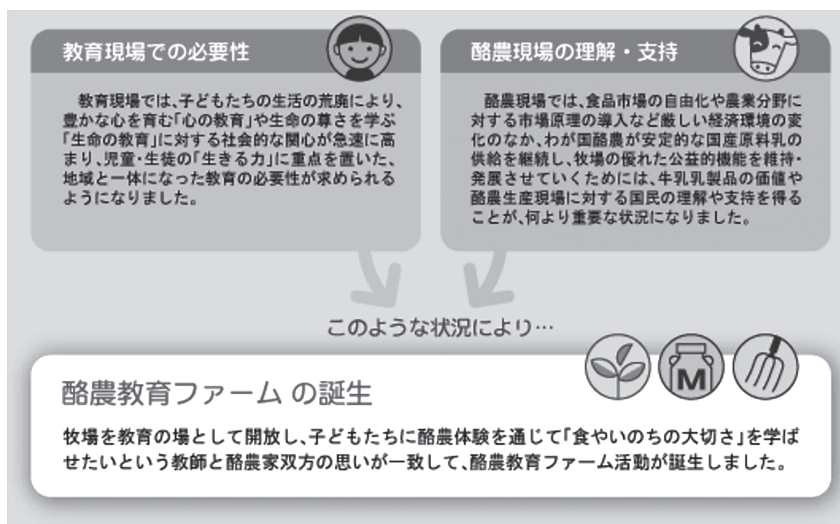
ただし，ここで注意しておきたい点は，酪農教育ファームとは，教育的観点からのみ成立したものではなく，産業，経済活動としての酪農や農業，あるいはその食糧供給機能や環境保全，余暇活動等の公益的機能に対する国民の理解と啓蒙を促すなど，多面的かつ総合的な目的を志向していることである（資料1）。子どもたちが，動植物と触れ合う中で学ぶ環境教育とあわせて，酪農・畜産業にかかわる人々やそのくらし，わが国の食に関する課題，地域や社会との関係等までを含めて幅広く学習の対象とするのが酪農教育ファームの特徴といえよう⁹⁾。

Ⅲ 酪農教育ファームと領域「環境」および生活科との接点

では，こうした酪農教育ファームの目的や活動は，幼児期・児童期の子どもたちの環境教育とどのように結びつくのか。幼稚園教育における領域「環境」と小学校生活科の学習内容との接点を中心に検討する。

1. 領域「環境」との接点

新幼稚園教育要領において，領域「環境」の目的は，「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり，それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」とされ，「（1）身近な環境に親しみ，自然と触れ合う中で様々な事象



資料1 酪農教育ファーム成立の背景

(一般社団法人中央酪農会議「酪農教育ファームとは」

<https://www.dairy.co.jp/edf/gaiyo.html> より引用。) ¹⁰⁾

に興味や関心をもつ。(2) 身近な環境に自分から関わり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」の3つのねらいが示されている(文部科学省2018b)。

また、内容として、12の項目が挙げられているが、そのうち、自然環境に関係するものとしては、「(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。(4) 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて遊ぶ。(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」(文部科学省2018b)が挙げられよう¹¹⁾。

さらに、これら領域「環境」の目的やねらい、内容に関して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「(7) 自然との関わり・生命尊重」が示され、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高

まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気づき、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にす気持ちをもって関わるようになる。」(文部科学省 2018c) と述べられている。「心の教育」や「いのちの教育」などの支援を目的の一つとする酪農教育ファームとつながる部分である。

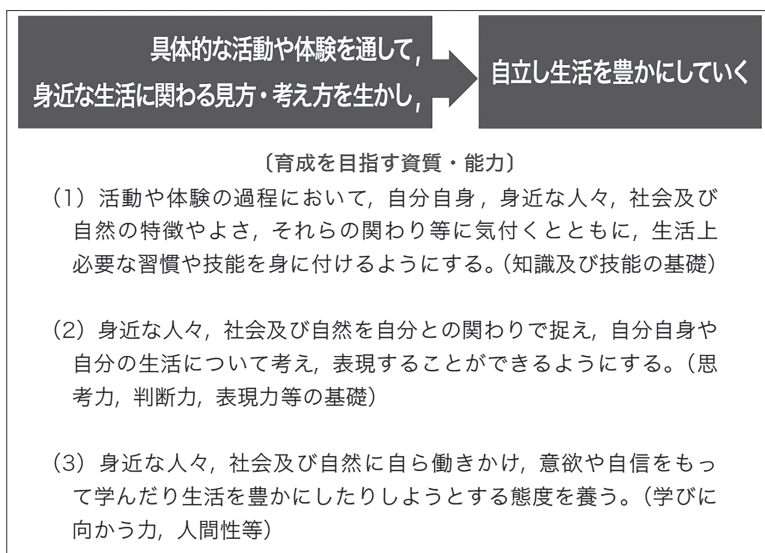
加えて、内容の取扱いにおいて、「(2) 幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるよう工夫すること。」(文部科学省 2018b) とある。この点でも、牧場での搾乳や餌やりなど、様々な具体的な体験実習をとおして動物たちと触れ合う酪農教育ファームは、領域「環境」の目的やねらいに適った教育実践現場として捉えることができよう。

2. 生活科との接点

新学習指導要領において、生活科の目標は、「具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」(文部科学省 2018a) とされ、教科目標の構成が、資料2のように示されている。

さらに、「ここでいう具体的な活動や体験とは、例えば、見る、聞く、触れる、作る、探す、育てる、遊ぶなどして対象に直接働きかける学習活動であり、また、そうした活動の楽しさやそこで気付いたことなどを言葉、絵、動作、劇化などの多様な方法によって表現する学習活動である。教科目標の冒頭に具体的な活動や体験を通してとあるのは、生活科の学習はそうした活動や体験をすることを前提にしていることを示している。すなわち、生活科は、児童が体全体で身近な環境に直接働きかける創造的な行為が行われるようにすることを重視しているのである。」(文部科学省 2018d) と記述されている。

こうしてみると、低学年の児童の発達段階を踏まえ、自然や社会、人との直接的な体験学習を基軸とする生活科にとって、酪農教育ファームの活用意義は大きいと思われる。



資料2 新学習指導要領における生活科の教科目標の構成
(文部科学省(2018d)より引用。)

また、従前からの生活科の内容9項目、すなわち、「(1)「学校と生活」、(2)「家庭と生活」、(3)「地域と生活」、(4)「公共物や公共施設の利用」、(5)「季節の変化と生活」、(6)「自然や物を使った遊び」、(7)「動植物の飼育・栽培」、(8)「生活や出来事の伝え合い」、(9)「自分の成長」(文部科学省2018d)の内容が見直され、新たな全体構成が示された(資料3)。各内容に、これまでと同じ「児童が直接関わる学習対象や実際に行われる学習活動等」と、「育成を目指す資質・能力の三つの柱」として「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「知識及び技能の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の3要素が組み込まれている(文部科学省2018d)。それぞれの「学習対象・学習活動等」に挙げられたような体験活動・学習をとおして、他の3要素に示された「資質・能力」の具体的な育成が図られるようになっている。

この全体構成の中で、自然環境に関する内容としては、(5)「季節の変化と生活」と(6)「自然や物を使った遊び」、(7)「動植物の飼育・栽培」などを考えてよいだろう。例えば、内容の(7)では、「動物を飼ったり植物を育て

階層	内容	学習対象・学習活動等	思考力, 判断力, 表現力等の基礎	知識及び技能の基礎	学びに向かう力, 人間性等
学校、家庭及び地域の生活に関する内容	(1)	・学校生活に関わる活動を行う	・学校の施設の様子や学校生活を支えている人々や友達、通学路の様子やその安全を守っている人々などについて考える	・学校での生活は様々な人や施設と関わっていることが分かる	・楽しく安心して遊びや生活をしたり、安全な登下校をしたりしようとする
	(2)	・家庭生活に関わる活動を行う	・家庭における家族のことや自分でできることなどについて考える	・家庭での生活は互いに支え合っていることが分かる	・自分の役割を積極的に果たしたり、規則正しく健康に気を付けて生活したりしようとする
	(3)	・地域に関わる活動を行う	・地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考える	・自分たちの生活は様々な人や場所と関わっていることが分かる	・それらに親しみや愛着をもち、適切に接したり安全に生活したりしようとする
身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容	(4)	・公共物や公共施設を利用する活動を行う	・それらのよさを感じたり働きを捉えたりする	・身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かる	・それらを大切にし、安全に気を付けて正しく利用しようとする
	(5)	・身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を行う	・それらの違いや特徴を見付ける	・自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付く	・それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする
	(6)	・身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を行う	・遊びや遊びに使う物を工夫してつくる	・その面白さや自然の不思議さに気付く	・みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする
	(7)	・動物を飼ったり植物を育てたりする活動を行う	・それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち働きかける	・それらは生命をもっていることや成長していることに気付く	・生き物への親しみをもち、大切にしようとする
	(8)	・自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行う	・相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んで伝える	・身近な人々と関わることやよさや楽しさが分かる	・進んで触れ合い交流しようとする
	(9)	・自分自身の生活や成長を振り返る活動を行う	・自分のことや支えてくれた人々について考える	・自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かる	・これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもち、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活しようとする

資料3 生活科の内容の全体構成
(文部科学省(2018d)より引用。)

たりする活動を行う」という「学習対象・学習活動」が挙げられ、育成を目指すそれぞれ3つの資質・能力について、「それらの育つ場所，変化や成長の様子に関心をもって働きかける」，「それらは生命をもっていることや成長していることに気付く」，「生き物への親しみをもち，大切にしようとする」と、具体的に示されている。このような，体験活動・学習にもとづく必要な資質・能力の育成という学習構成は，酪農教育ファームにおける体験活動の実践とその教育的効果（目的）の関係に重なる。さらに，(6)「自然や物を使った遊び」と(7)「動植物の飼育・栽培」といったような複数の内容を組み合わせた単元構成を考える場合においても，酪農教育ファームは，生活科の「見る，聞く，触れる，作る，探す，育てる，遊ぶ」などの多様な体験学習に，比較的対応しやすく，教材として活用できる可能性を持つといえよう。

IV 幼児期・児童期の環境教育と酪農教育ファームの可能性

以上のように，酪農教育ファームの活動内容・目的は，体験活動・学習を前提あるいは重要視する，領域「環境」と生活科の目標や求められる学習内容において通底する部分が多い。感受性豊かな幼児期・児童期に，牧場の動物たちや畑の農作物（植物）に触れることは，子どもたちの心身の発達・成長において大きな役割を果たす。あるいは，直接酪農とは関係しないかもしれないが，牧場を探検することで，敷地内での昆虫やミミズ，カエルなどの小動物，タンポポやシロツメクサなどの植物を発見したりと，そこから，遊びや観察へと子どもたちの行動がさらなる広がりを持つ可能性もある。これに関して，国立教育政策研究所教育課程研究センター（2014）は，「環境教育においては，体験活動が学習活動の根幹となっていると言っても過言ではない。特に，幼稚園・小学校の段階においては，体験活動が遊びや学びの土台・出発点となり，感性を働かせ，問題解決を促進し，興味・関心を高め，知の実践化を確かなものにしていく。すなわち，体験活動は，子供の学びと成長の過程全体において重要なものと言える。」と述べる。こうしてみたとき，酪農教育ファームが，幼児期・児童期の子どもたちの環境教育において果たす役割は大きいと思われる。

また，本文中や注でも多少言及したが，領域「環境」および生活科における

「環境」とは、自然に限らず、身近な人々や社会も含めた幼児・児童を取り巻く「環境」の全てを指す。例えば、食と命について考えたとき、動物を単に“かわいい”という言葉で表現されるような愛玩の対象として、あるいは極端な人格化によって捉えてしまう“命”でとどまってしまうとは意味がない。“自分たちはその命をいただいていること”を出発点として、家畜を育て世話をする酪農・畜産業に携わる人々、生乳や肉などの原料を加工し、乳製品や肉製品などを生産する人々、原料や製品を運ぶ人々、それらの販売を担う人々など、食をめぐる様々な人々の存在と結びつきを知り、これらすべてがつながって、私たちの命や暮らし、地域が支えられていること、そして、自分がその“つながり”の中で存在していることに気づくことが重要となる¹²⁾。もちろん、特に幼児の場合は、これらすべてを理解させることは難しいだろう。しかしながら、その一部を、目の前の動物との関係性について異なる視点から、つまり、先ほど述べたように、“かわいがる”対象でもあるが、“食べる（命をいただく）”対象でもあるということに気づかせること自体が、「環境」と「自分」の関係についての認識を高めていく出発点となろう。酪農教育ファームは、子どもたちに、こうした“つながり”と、その中における自己の位置づけへの気づきを促し、考える契機を与える場ともなりうる。人と自然、人と人、人と社会の結びつき、それらと自己との関係を“発見”し、多角的・総合的な視点から「環境」を理解していくことは、ESD の概念を取り入れたわが国の学校園教育においても意義がある。酪農教育ファームは、その実践のための教育的機能を有するものと考えられる。

注および参考資料（一部引用資料）

- 1) 例えば、①中央教育審議会（答申）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（平成28年12月21日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日2020年5月17日）や②日本ユネスコ国内委員会「学習指導要領におけるESD関連記述」<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339973.htm>（最終閲覧日2020年5月17日）などを参照のこと。
- 2) 日本ユネスコ国内委員会「1. ESD（Education for Sustainable Development）とは？」<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>（最終閲覧日2020年5月17日）な

などを参照のこと。

- 3) ユネスコスクールに関しては、①日本ユネスコ国内委員会「ユネスコスクール」<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339976.htm>（最終閲覧日2020年5月17日）、②文部科学省・日本ユネスコ国内委員会「ユネスコスクールで目指すSDGs持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development」(2018年11月改訂)http://www.esd-jpnatcom.mext.go.jp/about/pdf/pamphlet_01.pdf（最終閲覧日2020年5月17日）などを参照されたい。
- 4) さらに、大島・井上（2008）は、フランスにおける教育ファームの条件について、次の9つを挙げている。①家畜ないし耕作（あるいは両方）を提示する施設であること。②子どもや若者を、学校教育ないし校外活動の枠内で受け入れていること。③教育を目的とした活動であること。④何らかの問題を抱えた人々が社会に溶け込むようにすることも使命としていること。⑤受け入れは単発ではなく、頻繁におこなっており、その活動の発展を願っているファームであること。⑥教育ファームには、農業生産のために存在する農場と、教育のために設立された農場とがある。⑦ネットワークに属するか否かは問題ではない。⑧「教育ファーム」以外の呼称も認められる。⑨教育ファームは関係する法律に従うものでなければならない。
- 5) 日本における教育ファームとは、「自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めること等を目的として、市町村、農林漁業者、学校などが一連の農作業等の体験の機会を提供する取組」であり、「農林漁業者など実際に業を営んでいる者の指導を受けて、同一人物が同一作物について2つ以上の作業を年間2日以上の間行う」取組（農林水産省消費・安全局消費者情報官2007）とされる（藤永2017）。
- 6) 具体的な教育ファームの活動内容の事例については、農林水産省（2011）や前掲5）の農林水産省消費・安全局消費者情報官（2007）などを参照されたい。
- 7) 一般社団法人中央酪農会議「酪農教育ファームとは」<https://www.dairy.co.jp/edf/gaiyo.html>（最終閲覧日2020年5月17日）による。
- 8) ちなみに、酪農教育ファーム認証制度は、その後、認証規定の見直しや改正がなされ、現在に至っている（前掲7）および一般社団法人中央酪農会議「新たな認証規程に関するQ & A」<https://www.dairy.co.jp/edf/makiba/index.html>（最終閲覧日2020年5月17日）による）。
- 9) これに関して、伍代（2000）は、当時の学校教育の状況を踏まえ、「折しも教育現場は教育改革の重要課題である「子どもたちの生きる力」をどう育むべきか、という問題に直面していた。従来の詰め込み式教育を改め、子どもたちの想像力や観察力、自己判断能力などを養い、生きる力を育もうというもので、社会科や理科といった従来の教科を横断した『総合的な学習』の時間が盛り込まれた。同時に“体験型学習”の必要性や“地域にあった学習テーマ”の設定なども決定され、農村や牧場を新しい教室とした『総合的な学習』が注目され始めた。農業生産だけでなく環境保全、治水、循環型社会、都市生活者にとっての休息の場、家畜や動物を通じた命との触れあいの場など、農業の持つ多面的役割を教育の中で活用していこうとするものである。まさに酪農生産現場・牧場と、教育界の目指すところが完全に一致

したと言えよう」と、日本における酪農教育ファームの成立背景について述べている。

10) 前掲7)

11) ただし、周知のように、「内容」として、この他に、「(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。」、「(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。」、「(7) 身近な物を大切にする。」、「(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。」、「(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。」、「(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。」、「(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。」、「(12) 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。」があり、領域「環境」で取り扱われる「環境」とは、幼児を取り巻く“人”や“もの”、“自然”、“社会”、“文化”、“生活”、“情報”など様々な意味を包含する（藤永 2019）。

12) 今回の新学習指導要領では、本文中の資料2をみても分かるように、教科の目標に、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という「見方・考え方」という概念が付け加えられた（文部科学省 2018d）。その上で、「生活科における見方・考え方は、身近な生活に関わる見方・考え方であり、それは身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、よりよい生活に向けて思いや願いを実現しようとすることであると考えられる。」（文部科学省 2018d）としている。酪農教育ファームにおける総合的な環境学習は、こうした生活科の「見方・考え方」ともつながってこよう。

引用・参考文献

- 大島順子 (1999) : 『いのち、ひとみ、かがやく フランスの教育ファーム』酪農教育ファーム推進委員会。
- 大島順子・井上和衛 (2008) : 『海外グリーン・ツーリズム研究シリーズ フランスの教育ファームに学ぶ～その理念と活動～』財団法人都市農山漁村交流活性化機構。
- 木下博義・秀島 哲・川崎弘作・寺本貴啓・松浦拓也・角屋重樹 (2009) : 酪農教育ファームを通して子どもに育成される力に関する基礎的研究—大学生を対象とした調査をもとに—。広島大学大学院教育研究科紀要 第二部, 58, 11-17。
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター (2014) : 『環境教育指導資料【幼稚園・小学校編】』東洋館出版社。
- 伍代正樹編・酪農教育ファーム推進委員会監修 (2000) : 『酪農教育ファーム—体験を通して豊かな人間を育む』酪農総合研究所。
- 手島利夫 (2017) : 『学校発・ESDの学び』教育出版。
- 日本環境教育学会・日本国際理解教育学会・日本社会教育学会・日本学校教育学会・SDGs市民社会ネットワーク・グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン編 (2019) : 『事典 持続可能な社会と教育』教育出版。
- 日本ユネスコ国内委員会 (2018) : 『ESD (持続可能な開発のための教育) 推進の手引 (平

- 成 30 年 5 月改訂』日本ユネスコ国内委員会。
- 農林水産省 (2011)：『子どもが変わる地域が変わる～教育ファーム事例集～』農林水産省。
- 農林水産省消費・安全局消費者情報官 (2007)：『GO！GO！教育ファーム～教育ファーム事例集～』農林水産省消費・安全局消費者情報官。
- 羽豆成二 (2006)：我が国における「酪農教育ファーム」の成立とその教育的意義。帝京短大紀要, 14, 49-59.
- 羽豆成二 (2008)：我が国における「酪農教育ファーム」の成立とその教育的意義 (その 2)。帝京短大紀要, 15, 31-42.
- 藤永 豪 (2009)：わが国における教育ファームの実践状況と地域的差異。佐賀大学教育実践研究, 25, 107-116.
- 藤永 豪 (2017)：小学校生活科における体験学習と教育ファーム。佐賀大学教育学部研究論文集, 2(1), 169-176.
- 藤永 豪 (2019)：幼稚園教育要領における領域「環境」について。人間科学論集, 15(1), 291-301.
- 藤永 豪 (2020)：幼稚園教育における領域「環境」とESDおよびSDGsとの関連について。西南学院大学人間科学論集, 15(2), 359-372.
- 文部科学省 (2008)：『小学校学習指導要領解説 生活編—平成 20 年 8 月』。日本文教出版株式会社。
- 文部科学省 (2018a)：『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』東洋館出版社。
- 文部科学省 (2018b)：『幼稚園教育要領 (平成 29 年告示)』東山書房。
- 文部科学省 (2018c)：『幼稚園教育要領解説—平成 30 年 3 月』フレーベル館。
- 文部科学省 (2018d)：『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 生活編』東洋館出版社。
- 酪農教育ファーム専門委員会監修 (2005)：『酪農体験学習 ハンドブック』社団法人中央酪農会議。